よこすか景観ニュース

第11号

発行 2011/03/01
よこすか都市景観協議会

① 走水から眺めた馬堀海岸

② 昭和48年 走水から眺めた馬堀海岸

③ 現在の馬堀海岸の遊歩道

④ 昭和40年 埋め立てが始まった頃の大津・馬堀海岸

. Y O K O S U K A C I T Y .

馬堀海岸・走水の景観変遷

■馬堀海岸の昔と今

～変わる「風光明媚」のかたち～

まっすぐに伸びる馬堀海岸の国道16号線と馬堀海岸団地。ここはかつて一面が白砂の浜で、江戸時代、日本の誇る浮世絵師・歌川広重が「浦賀道大津海岸」として描いたほどの美しい景色でした。波が静かな遠浅の海岸が堀ノ内から馬堀まで続き、明治時代には、他県からも多くの海水浴客が訪れるようになりました。(写真④)

昭和40年代の埋立事業で現在の地形となり、のちに色彩景観形成地区となる一大住宅地マボリシーハイツが誕生。平成の時代に入ってからは、高潮対策の護岸整備により、住宅地を水害から守るための大きな石が一直線に埋め込まれ、潮風を感じながら散歩を楽しめる遊歩道が整備されます。(写真③)

眺望も抜群で、北にベイブリッジとランドマークタワー、東に房総半島、西に富士山が望めます。

また平成21年には、900mにわたる護岸壁に市民が描いた壁画20点の「うみかぜ画廊」(上写真)が完成。にぎわいを演出するとともに、観音崎にある横須賀美術館へと歩みを進める人たちの雰囲気を盛り上げてくれます。

(中川委員)

■よこすかシーサイドマラソン

かつて京浜急行馬堀海岸駅の前、道路を挟んですぐの所に海水浴で賑わった海岸がありました。

昭和40年頃からの埋め立てにより、現在では住む人によって育てるまちづくりが行われています。海岸線に沿って走る国道16号線に植えられ、自然の状態で管理されているカナリーヤシの並木もその一つです。

そして11月になるとこの道は、約5,500人ものランナーが参加する横須賀の風物詩「よこすかシーサイドマラソン」の舞台にもなります。

この「よこすかシーサイドマラソン」は横須賀の魅力を体感してもらうため、三笠公園を拠点とし、猿島を望む横須賀海岸通りや走水、観音崎などをコースに設定しています。それら一つ一つを繋げることが横須賀の大きな魅力になっているのです。

その昔海だった道を走るランナーや、手を取り合って走る親子も横須賀の一つの景観として、市民の方々に愛される。そんな大会になることで、スポーツを通した地域コミュニティーが生まれ、まちづくりの原動力に繋がっています。

(及川委員)

■走水水源地と桜

走水は、横須賀市水道の始まりの水源地で、降水後20数年を経て涌き出る走水の水は,水質が良く、カルシウムなどを多量に含み、1日に2,000㎥の水が湧き出ています。戦時中、艦船に積まれたこの水は、赤道を越えても腐らなかったと言われています。

また、走水水源地は桜の名所でもあり、青い海を背景に咲く桜の花は見事です。開花時期には、樹齢約40年のソメイヨシノやオオシマザクラ、約130本が，幅20～40m，延長250mにわたって形成している桜並木を一般開放し、花見客を大変喜ばせています。

明治9(1876)年、走水の地下水に目をつけた横須賀造船所のフランス人技師ヴェルニーは、走水湧水を造船所の用水として確保することを目的に、約7kmの水道管を敷設しました。走水と馬堀小学校との間にある二つのトンネルは、その際、水道管を通すために造られたものです。

水源地の山際にあるイギリス積みの赤れんがの建造物は、明治35(1902)年に完成した貯水池です。上屋はれんが造り、内部天井がアーチ型の「ヴォールト屋根」になっているのが特徴で、古びたれんが積みが歴史の重みを感じさせます。

湧水は持ち帰りも出来ますので是非一度訪れてみてはいかがでしょうか。

(加藤委員)

■馬堀海岸インター

最近の馬堀海岸地区の大きな変化といえば、平成20年3月に全線開通した横浜横須賀道路の終点、馬堀海岸インターでしょうか。

下り方面の浦賀ICから馬堀海岸ICに近づき、最後のトンネルを抜けると、東京湾が正面に広がる絶景の景観が待っています。

現在、インター側に日帰り温浴施設などが建設されています。